

日蓮聖人遺文の継承に関する一考察

―特に「慶長本」に関する考察を中心に―

木 村 中 一

一、日蓮聖人遺文について

日蓮聖人の教学・信仰の根幹は法華経であることは言うまでもない。そして日蓮教団における一つの特徴ともいえるのが、その信仰の伝達を「口伝」だけでなく聖人のお書きになった「日蓮聖人遺文」（以下、遺文と略記す）によって弟子・檀越に伝えられていったという点である。これは他宗の、いわゆる「鎌倉の祖師たち」と呼ばれる鎌倉新仏教他宗派の祖師たちとの大きな相違点である。それらは日蓮聖人が檀越に宛てて多くのお手紙をお書きになったこと、そしてその中において必ず信仰の勸奨（法華経受持の勸奨）について記されていることに起因する。

遺文の種類は、その内容から大きく五分することができる。すなわち①『立正安国論』・『如来滅後五百歳始観心本尊抄』などに代表される「著作」、②「富木殿御返事」・「四条金吾殿御返事」など弟子檀越に宛てた「消息（手紙）」、③「一代五時図」・「戒之事」など教理・教学を図式化して弟子らの教学伝達の一助としたであろう「図録類」、④著作や消息作成のため、また対論・法論の際に使用したであろう経・論・疏の一節を書写した「要文」、⑤金沢文庫蔵、

円珍仮託本『授決円多羅義集唐決』や中山法華経寺蔵、『五輪九字明秘密釈』など他宗の宗義書などを日蓮聖人自身が書写された「書写本」である。これらの遺文によって日蓮聖人滅後、残された檀越たちは、その内容から、また文字から今は亡き日蓮聖人の姿を見るのである。つまり弟子檀越らのおもいの「よすが」となっていくのである。しかしそれだけでなく、残された弟子たちは日蓮聖人からの「口伝」と共に、特に消息類などから、そこに記される「日蓮聖人の法華経受持の勸奨」に表される「日蓮聖人教学」を信仰の根幹としていくのである。

二、日蓮聖人遺文研究史について

このような遺文に関する研究史において、「遺文編集の書誌学的考察」として七〇〇年の期間をみることができ、それは前期（四〇〇年）と後期（三〇〇年）の二期に分けられる。

前期は「蒐集・恪護の時代」とし、信仰の継承という観点から高弟たちよっての「日蓮聖人遺文の蒐集・恪護」という動きの形成をみるができる。この蒐集・恪護は大きく四地域に分けることができ、その一つ一つを確認すると、まず挙げられるのが中山における蒐集・恪護である。言わずもがな日蓮聖人の四大檀越の一人に数えられ、聖人滅後に出家し名を常修院日常と改めた富木常忍はその邸宅・持仏堂を寺院へと改修し、ここにおいて聖教（真蹟遺文等）目録「常修院本尊聖教事」と同時に「日常置文」を定め、物惜しみと言われようが寺外にこれらを出すことを許さず、またさらに懈怠無くこれを護持することを定めた。この遺文恪護の意識は後に「常・高・祐三師」と称せられる中山第二祖日高の「日高置文」、第三祖日祐の「本尊聖教録」・「祐師置文」と受け継がれ、現在においてもその精神は保ち続けられている。これは日蓮聖人が富木常忍に宛てられた「富木入道殿御返事」に記される「貴辺に申付し

一切経の要文智論の要文五帖一処に可被取集候。其外論釈の要文散在あるべからず候。」の一文から、常忍が常々心に留め置き、これを護法の理念としたのであろうと推察される。

次に挙げられるのが身延における蒐集・恪護である。身延においての目録の成立は中山のそれと比べると遅く、形となったのは身延十二世円教院日意の「大聖人御筆目録」をその初めとするようである。しかしながら蒐集・恪護の動きはこの目録制定よりも早く、また聖人晩年九ヶ年を過ごされた身延という土地という事からも多くの遺文の蒐集が行われていたようである。

また富士における遺文の蒐集も挙げられる。富士における蒐集については目録そのものは伝わっていないが伝・日興「富士一跡門徒存知事」に日興が書写した写本を中心として数々の遺文が伝来していることを伺うことができ、さらにこの中には写本の正本がどこに伝来しているかが詳細に記されている。さらに北山本門寺に「信伝写本」が伝わっており、これより十二遺文収録されていることがわかる。

さらに京都において、諸本山が真筆遺文が恪護しており、各本山間にて種々の「貸借」があったようであり、それが現在に伝わる。これら地域における遺文の「蒐集・恪護」の功により現在二四〇余編（一・二行のものも含め）の遺文が現在その姿を見ることができるのである。

さらに「蒐集・恪護の時代」には遺文の継承と伝来の流れもみることができ、それは中世における写本による遺文の伝承と近世における刊本による遺文の伝承とに区別できる。中世における遺文の写本化は日蓮教学の伝播からの発生であることは、先述した「遺文に記される日蓮聖人の法華経受持の勸奨に表される日蓮教学を信仰の根幹」として教学理解を深めていくということに起因することは理解に難くない。

この写本による遺文の継承は①個別写本と②集成写本の二系統に分けられ、①個別写本は先の「富士一跡門徒存知事」に記される日興による「浄蓮房御書」や「開目抄」、「撰時抄」などのように遺文一編一編を個別に書写したものであり、日興写本が伝わることより初期日蓮教団内において早くからそのような動きがあったことが指摘できる。この個別写本は様々な門流の先師が行っており枚挙に暇がない。

続いて②集成写本とは遺文各編を集成し伝来させた、いわゆるセット本であり、代表的なものを挙げると、第一次集成本として『録内御書』、第二次集成本として『録外御書』をあげることができ、その他にも「他受用御書」なども挙げられる。この遺文の集成化は「遺文の蒐集・格護」の動きの一つとして挙げられ、前述の第一次集成本『録内御書』に付されている伝・六老僧加判の「御書目錄日記之事」に依れば、それは、日蓮聖人遺文の散逸防ぐため、さらに日蓮聖人の遺文偽造を防ぐため日蓮聖人の遺文を集成したという。今挙げた遺文の偽造とは「偽書の生成」として日蓮聖人滅後に分流していった日蓮教団各門流の正当性を主張するため生成されていったと現在考えられている。さて集成写本『録内御書』には諸本存在し、現在最古の系統であろうと言われているのが平賀本土寺蔵「平賀本」であるという。冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』²⁾によるとこの「平賀本」は書写年次こそ大永八年（一五二八）八月と二番目に古い伝来とされる日朝写本『録内御書』（日朝本）の書写年次（一四八〇年）より新しいが「平賀本」には底本があり、その成立が一四四三年と古いため最古の系統であろうとされているのである。現在中世に書写された『録内御書』が十三点確認されており、また『録外御書』も四点確認されている。

このような集成本には今もなお、多くの不明点が指摘されており、特に『録内御書』『録外御書』についてはその成立年代すら確定していない。古来の伝承によると『録内御書』は身延山第十一世行学院日朝写本『録内御書』に収

録されている伝・六老僧加判の「御書目錄日記之事」より日蓮聖人第一周忌成立とされており、さらに『録外御書』は円明院日澄『日蓮聖人註画讃』、本成房日実『当家宗旨名目』などによって第三回忌成立とされてきた。しかしながらこれらの説は古くは中世末期より否定されており、その根拠として前出の身延十二世日意は『録内御書』の収録文のずさんな不一致を指摘し、さらに六老僧日頂の「良実状」が『録内御書』に編入されており、六老僧加判であるとは考えられないと指摘している。この点については弘経寺日健も『御書鈔』にて、一如院日重も『見聞愚案記』にて同様の指摘をしている。また近世有数の学僧であった勇猛院日覺も『祖書編輯考』中にて『録内御書』一周忌成立説否定について十項目挙げ指摘し、また同書にて勇猛院日覺は『録外御書』第三回忌成立説も十項目挙げ否定している。現在この『録内御書』成立年代について諸説あり、山川智応氏は祖滅一〇〇年前後、鈴木一成氏は同一〇〇年頃、浅井要麟氏は同一二〇〇〜一三〇〇年頃にて中山系学僧の手によって成立したのではないかとしている。また宮崎英修氏は上記三名とは異なり、祖滅一四〇〇〜一五〇〇年頃、身延系の学僧の手による編集であると指摘している。つまりこれら諸説より『録内御書』は祖滅一〇〇〇〜一五〇〇年頃に成立、『録外御書』はそれ以降であろうと推察されるのである。

時は流れ江戸時代の出版事業隆盛の文化的背景と相俟って、それまで中世にて写本で伝えた日蓮聖人遺文が「原本・刊本化」され刊行されていく。この刊本による遺文の伝承には写本遺文と同様に①個別刊本と②集成刊本が存在する。

①個別刊本は遺文一編一編を個別に刊本化したものであり、個別写本と同様に枚挙に暇がない。また②集成刊本も集成写本と同様に代表的なものに刊本『録内御書』『録外御書』を挙げることができる。②集成刊本の諸本をみると、

その嚆矢として慶長期に成立した身延における御書五大部、百部限定の「慶長百部摺本」を挙げられよう。これは後に詳述するが身延二十世一如院日重が発願、弟子である日乾・日遠に校訂を命じ、これを受け両名が御書五大部を校訂し日源・日顛ら「日蓮宗工匠僧」とも言うべき僧侶に版木を彫刻させ完成した製版刊本である。次に挙げられるのが元和元年（一六一五）に京都本国寺にて完成した古活字版印刷による「元和本国寺本」（『録内御書』）である。この「元和本国寺本」について、先の冠氏はその著書の中において二種の「元和本国寺本」が存在していることを確認されている。以上のことから、この二種の集成本については僧侶による刊行、つまり「寺院版」ともいうべき刊行であることが伺えよう。しかしこれ以降、近世幕府の出版統制によって寺院における刊行は制限され、ここに日蓮宗関係書籍の刊行に出版業者（書肆）が介入するようになるのである。これは重版・類版を防ぐため、さらには幕府により情報統制の観点から版權を有さないもの（僧侶ら）は書籍を刊行・出版することができないというものであり、以後出版された書籍の大部分は書肆らの名を以て刊行されており、それらから書肆らの介在が見て取れるのである。これらによって日蓮聖人遺文の流布が飛躍的に進んだ点も指摘できるが、それと同時に、中世写本から問題になった遺文中文章表記における用字・用語の漢字化・仮名化・和文化が行われ（「読みやすさ」という視点においては利点として挙げられるが）それと同時に脱字・脱文・補入・転倒に拍車がかかった。これはただの誤記として指摘できるものもあるが、明らかにならなかの意図によって上記がなされていると思考される部分も存在し、このような問題の解決を主眼として刊本遺文の改訂・改稿が繰り返され、これらの改訂・改稿、さらに購読は熱心な日蓮宗有縁の僧俗の信仰の高まりによって支えられてきたのである。

以上、「蒐集・恪護の時代」は「遺文編集の書誌学的考察」七〇〇年に渡る期間の前期（四〇〇年）に位置し、そ

の後、後期（三〇〇年）として別種の時代に移る。この後の時代は「遺文編纂の時代」とされ、新たな視点から遺文を考察するようになる。その新たな視点とは遺文の編年体に置き換え、編纂するという動きである。

この「遺文の編年化」は近世に中山の住僧日奥が『録内御書』の収録遺文を編年体に集成したことに端を発し、それ以降日蓮教団において種々の編年体御書目録が編纂されるようになる。この日奥による目録の編纂（『御書新目録』の編纂）について浅井要麟氏や鈴木一成氏などは「遺文の編年体目録の先駆」として高い評価をなしている。つまり遺文の編年化によって、それまで日蓮聖人遺文を流布させていた中心的な書籍であった『録内御書』・『録外御書』などの集成本、特に『録内御書』は重要な遺文（五大部）をその始めに配置していたが、この編年体御書目録の成立によって後の遺文の編纂は大きくシフトチェンジしていくのである。つまり編年体御書目録成立により、以前では困難であった聖人の生涯および思想信仰を遺文を通じて追体験することが可能になり、この視点から一妙院日導・勇猛院日麿らをはじめとする近世の学僧の著作、また後世の教理・教学理解に後の章にて述べる「新たな新局面」をもたらしたのである。これらから「編年体御書目録」の成立は、遺文研鑽・遺文集成上のみならず教学・教学史上にても極めて重要な事項であり、種々の研究において一時代が画されたことと表わすことができる。

さらにこの遺文の編年化は右記の利点より、在家日蓮聖人信奉者であった小川泰堂が編纂する編年体遺文全集『高祖遺文録』を始めとする近現代における遺文全集の刊行に影響をあたえ、現行の遺文全集のほとんどは編年体を採用するようになるのである。まさに「編纂の時代」は編年体御書目録の作成、そして編年体遺文全集成立の時代であるといえるのである。

現代において真蹟遺文の複製、または研究について、神保弁静氏による『日蓮聖人御真蹟』（大正二、三年刊）や

片山隨喜居士・山中喜八氏による『日蓮大聖人御真蹟』（昭和二七、二八、二九年刊）の美術印刷による遺文復元、『定本法華経』の刊行などは大きな功績であることが知られ、また山中氏は『日蓮聖人真蹟の世界』などの大著をまとめられている。さらに現今の中尾堯氏の驚異的な調査・研究に基づく顕著な業績・著作は枚挙に暇がなく、それは昨今宗門にとどまらず学会に認められ文化諸方面に衝撃を与えているところである。また寺尾英智氏の『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』においても同氏の真蹟研究における調査・研究の多大な成果として挙げる事ができよう。

また写本・刊本遺文の研究についても、浅井要麟氏の『日蓮聖人教学の研究』や鈴木一成氏の『日蓮聖人遺文の文献学的研究』などが著名であり、この浅井要麟氏は日蓮聖人が自ら実践された宗教的体験の記録である遺文を研究対象とし、教学・書誌学・古文書学・文献学的立場からの新たな学問研究の方法を確立された。これこそが現行いわゆる「祖書学」であり、この「祖書学」的立場で冠賢一氏はその著書『近世日蓮宗出版史研究』などにおいて日蓮宗出版史研究の先駆をなし、その論考が世間の耳目を集めていることはいうまでもない。

三、「慶長本」の発見について

さて、遺文の継承は中世において写本にて、また近世においては刊本にて伝来されていったことは前述の通りである。この近世刊本による遺文の伝来、特に遺文五大部と称される『立正安国論』・『開目抄』・『如来滅後五百歳始観心本尊抄』（以下、『観心本尊抄』と略記す）・『撰時抄』・『報恩抄』の遺文集成本や中世に成立したとされる同じく遺文集成本である『録内御書』・『録外御書』などの遺文刊行の嚆矢とされるのが先述の慶長年間、身延で刊行されたとされる「御書五大部百部刷本」（全巻数不明・以下、「慶長本」と略記す）である。

この「慶長本」の興起は伝承によると、一如院日重が先の五大部の校訂を志したが達することなく、後に弟子である寂照院日乾（以下、日乾と略記す）と心性院日遠（以下、日遠と略記す）にその校定を命じ、それを受けた両師は各所に蔵される五大部の真蹟遺文を校訂書写し、その板木彫刻を日誉・日源・日頼ら、いわゆる「日蓮宗工匠僧」に命じて百部に限り刊行したと伝わる。³ 先にも述べたが「慶長本」の出版年・出版地について古来より伝承にて身延での開版とされてきているが、先学らの研究により慶長十四年（一六〇九）出版、出版地未詳⁴、慶長七・八年（一六〇二・三）頃、身延山での出版⁵と現在では諸説存在し、そのいずれも明確でない。「慶長本」について不明な点が多いのはこの集成本が現在に至るまで一部たりと発見されなかった事に起因する。それは「御書五大部百部刷本」の名が示すとおり、百部という極めて少量の刊行部数によるものであり、『日蓮宗事典』⁶や兜木正亨氏、さらに冠賢一氏⁷もそろえて「現存していない」と記している。唯一、宮崎英修氏のみが、

一番最初に出版された物というと、諸君も御存じのように百部摺本です。（中略）わずかに百部しか摺らなかつたといわれておりますけれども、これを百部摺本といって文禄四年の頃にこれが出版されました。ところが現在は一冊も残っていないんです。聞くところによりますと、亡くなりました稲田海素先生が一冊だけ持って、これは『安国論』であったか『本尊抄』であったか、持っておられたと。けれども先生の御遺蔵の蔵書を先年調査いたしました時も、とうとうこの五大部百部摺本は発見することができませんでした。⁸

と稲田海素氏が一部だけではあるが所有していたらしいということを伝えており、各氏がそろって指摘する通り「慶長本」は現在もなお遺文出版史上、伝説的遺文集であることが伺えるのである。しかし先年、立正大学日蓮教学研究所が稲田海素氏が住職を務められていた東京品川区圓真寺において書籍整理を行った際、「慶長本」の一部である

『観心本尊抄』を発見することができた。この発見は先述の宮崎英修氏の指摘と符合する。この新発見により論者は過日、真蹟『観心本尊抄』と「慶長本」『観心本尊抄』、さらには後に詳説する「慶長本」系遺文集成本である深見要言版『御書五大部』所収『観心本尊抄』の比較対照を行った。その結果、後に記すが九十六点の相違箇所を発見するに至った。⁹⁾

さて、この「慶長本」の奥書には

以正中山御正筆第一稿之本謹写之

寂照院日乾

と記されているのが確認できる。日乾は他の五大部も書写しており、その写本にはそれぞれ奥書が付されている。

『開目抄』上の奥書には、

於身延久遠寺以御正本校合了用可為證本

日乾¹⁰⁾

とあり、また『開目抄』下の奥書にも、

於身延山以御正本一校了後來用此可為證本

慶長九年甲辰六月廿八日 日乾¹¹⁾

と記されている。これらの例より先の「慶長本」にある奥書は「慶長本」の底本となった日乾による写本「観心本尊抄」に付された奥書を記したもので、つまり日乾の奥書を記していると指摘できる。さらにこれにより「慶長本」の編纂が伝承にある「一如院日重が先の五大部の校訂を志したが達することなく、後に弟子である寂照院日乾と心性院日

遠にその校定を遺命。それを受けた両師は各所に蔵される五大部の真蹟遺文を校訂書写」が正確なものであったといえるのである。

「慶長本」「観心本尊抄」には後世の手によるものと推定される墨書の題箋（「慶長十一年四月百部摺／観心本尊抄 完／身延山廿一代寂照乾師」と有り）が付されており、これより先述の先学らの出版推定年次とは異なる、「慶長十一年四月」刊行という新たな説が指摘できるのである。また表紙裏には過去の所有者の筆であろう「要言板ノ本尊抄ノ奥云 慶長十一年丙午四月廿八日乾遠師命工彫之」との一文が確認でき、この二つの書入は同一人物の手によるものであるかは不明であるが、「慶長本」が流布していた時代には「慶長本」が慶長十一年に刊行されたということが知られていたと指摘できる。また表紙裏の書入については、波線部の一語より深見要言編『御書五大部』刊行年次である文化五年以降の筆であることが分かる。つまり「慶長本」は文化年間には所々に存在していたと推察されるのである。

四、「慶長本」の継承と伝来

先述の通り「慶長本」の全容は現在みることはできないが、この「慶長本」を底本として写本・刊本化された「慶長本」系遺文集ともいえるものが現代に数種伝わる。その数種とは愛知県黒田法蓮寺所蔵の久成院日相写本「御書五大部」（以下、「日相本」と略記す）と深見要言が刊行した『御書五大部』（以下、「要言本」と略記す）である。¹³

「日相本」は久成院日相（以下、日相と略記す）が『御書用語式』述作の為、「慶長本」を弟子と共に書写した遺文集である。「日相本」は現在『立正安国論』・『開目抄』・『報恩抄』・『撰時抄』の四遺文のみ現存しており、『観心本

日蓮聖人遺文の継承に関する一考察（木村）

『尊抄』は欠損している。しかし後に記す「要言本」には「日相本」に付されていた「尾州黒田村法蓮寺御書見合の本」が収録されており、これより「日相本」の書写経緯などを知ることができる。

尾州黒田村法蓮寺御書見合の本

乾遠両師尊前御開板の五大部尾州黒田村和語式の撰者日相聖人御直筆の写本法蓮寺の什物に有之尾州名古屋神戸順正居士厚き世話を以能聴院妙是不肖要言と黒田村におるて写之右の本を以御書を校合す右五大部の跋書毎本に出之

此観心本尊抄ノ御真筆者中山ニ有之此已前乾師御校合アリ右此本者以テ乾師校合之印本ニ到ル点画字形ニ迄無ニ相違ニ写レ之者也然則御真筆第三転ノ本ナルコト無シ疑矣後覽之方々努々莫レ容ニ易ニスルコト之ヲ云々延山廿九世筵師御物語云此已前乾遠両師御相談アテ御書五大部之分以御直書一字一点モタカハス校合遊サレ則印板ニ被ニ仰付ニ百部程開板シ給テ頓而板行御停止有レ之彼印板于今身延御位牌堂ノ後戸ニ有之其比関東居住ノ学者又ハ身延旧住ノ僧侶中ニ彼印本所持之人有レ之当世者持ル人稀也筵師玉沢身延両所御在住之時彼印本ヲ御直書ト引合御覽アルニ一字一点モ御真筆ト相違ナシ依レ之彼印本弥御信仰ニ思召ト云々（已上御物語也）

予延宝年中和語式述作之刻以テ筵師ノ御口入ニ彼乾遠両師校合之印本ヲ依ニ洛陽妙覺寺日允師ノ許ニ借ニ求メ之ヲ安国論ト観心本尊抄ト以テ愚筆ニ点画字形等マテ無ニ相違ニ写レ之開目撰時報恩ノ三抄ヲハ便下シテ門弟ヲ無シ毫厘ノ差異ニ写之ヲ畢欲下且解ニ自己ノ迷ヲ且備ヘテ後代亀鏡ト云々矣後拜之人努々不レ可有ル疑滞一者也

于時延宝第七（太歳己未）南呂 日相在判

これによると日相は自ら書写した百部副本（慶長本）は真筆・乾師の印本に次ぐ第三転本であり『御書用語式』述作の爲、隆源院日筵の口入れをもって京都妙覚寺日允の許しを得、それを借り求め弟子らと共に五大部を書写したことを知ることができ、これより「日相本」が「慶長本」系遺文集であることがわかる。

「要言本」の出版は、『観心本尊抄』の巻末に付されている「御書開板の興起」より、『祖書目次』等の編者として名高い水戸の字僧、建立院日諦が日蓮聖人の第五百遠忌の慶讃事業として、御書の開板を志し、深見要言に諸本山に所蔵されている真筆との校合を命じられた事に起因を知ることが出来る。

御書開板の興起

水戸日諦聖人（高祖年譜撰者）御書開板の思召有之高祖五百遠忌のとし不詳要言正仰に云諸本山に有之御書御真筆と可引合の旨仰事有之然るに程なく聖人御遷化なり（二十五年以前より当年迄諸本山の御書校合す）中山御書校合の本正年譜目録の中に在所不知の御書予不思議に四聖人御校合の三巻を洛陽にて感得之其跋書に云安永九（庚子）歲從二月廿三日同廿七日迄於正中山経藏の内御書拜見不殘校合畢

中山七十九世 日是 校合

水戸 貞順日諦 同

小菅 可了日住 同

峯妙光寺 琢竹日義 同

中山の御書泉州堺妙国寺（隠居日虔尊前）御輪番の節御校合の本を以再校合尤版当檀林正所化版米料金五百両寄付の節中山御書六十余通板料金百両御奉納なり

この「要言本」について、近世後期に御書の文献学的・書誌学的研究に大きな影響を与えた学僧の一人である勇猛院日覺（一七五八〜一八二四）もその著書『祖書編輯考』において「又要言ナル者。依テ乾遠改正ノ五部ニ梓行ス焉。」と記し、「要言本」の底本は乾遠両師改正の五大部であるとしている。またさらに幕末・明治期に祖師伝・御書刊行に尽力し活躍した在家信奉者、小川泰堂（一八一四〜一八七八）は『高祖遺文録』『新刻高祖遺文引』に「又要言トイエルモノアリ、乾遠二師ノ校本ニ論三鈔等ヲ刊刻ス」¹⁶と記し、「要言本」が日乾・日遠の二師の校本を底本とし著したとしている。浅井要麟氏は『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻や、その著書『日蓮聖人教学の研究』¹⁸において「奥州勿来の隠士深見要言居士は、文化五年五月、かの乾・遠両師の校本に依つて、一論四鈔等の十四巻を翻刻して世に行つた。これを要言本といふ。」とし、高木豊氏は『開目抄』『撰時抄』『報恩抄』の分巻をめぐって「日蓮遺文の書誌に関する試論の一つ」¹⁹の中で要言本の底本について、前出の『観心本尊抄』巻末に付されている「御書開板の興起」²⁰の後に記されている「身延御書大野本遠寺御書」²¹より慶長本であると指摘している。しかし「要言本」には乾遠両師の跋文の他に『開目抄』、『撰時抄』、『報恩抄』の奥書に「日相本」の跋文を確認することができ、これより真筆・「慶長本」・「日相本」に次ぐ第四転本であろうと推察される。

また「要言本」には先述した通り「日相本」『観心本尊抄』に付されていたであろう「尾州黒田村法蓮寺御書見合の本」には、「日相本」の書写経緯と共に黒田法蓮寺には日相が書写した御書の写本があることが記され、その写本を要言が写し、校合したことを述べ、この五大部の跋文を各本毎に収載した事が記されている。

身延御書大野本遠寺御書

五大部守護国家論日妙聖人四条金吾殿地引書身延山秘蔵の 高祖大菩薩の御真筆を以慶長十一年より同十九年

またに乾遠兩尊前御開板有之予延山日全尊前の命を蒙り延山御本堂須弥檀の下より右板木を見出し十日程の間に自ら摺立候所彫刻実相房日晷日源日顛と有之然処二百年にも相成候事故守護国家論は所々に小文字残り虫喰損し五大部はハ文字所二欠け損し分りなり兼候所も有之大野山本遠寺に乾遠兩尊前の御開板の砌初て御摺立乃日遠尊前御所持の本有之所く御直し有之右の本を以延山にて摺立候本江文字書入これを以御書令開板者也外に身延の分の御書不残日遠尊前御直筆御校合本当貫主日迢尊前より御免を蒙り写取御正本と文字相違の分ハ字の脇へ○かくのごとく星を付る文字多き所へハ多き文字を取同じく○如是

奥州名古曾閑隠士

文化五（戊辰）年四月

開板主深見要言 花押

しかしながら「要言本」の『立正安国論』は、その「序」である「刻廣安国論序」によると、

刻廣安国論序

夫蒼海大故能産珊瑚真珠。崑岡高故能生玻璃琅玕。川広則多魚鼈。国大則必有賢者。凡天地之間。万物皆无漏於是理者也。故経伝広貴於略。具勝於闕久矣。況我釈道以八十億恆河沙乃至无数億偈。広其本者哉。茲我祖日蓮大菩薩所著安国論有安国論有広略二本。蓋其略者草而当时未暇於写正者。其広者正而脱其稿者。故大士方将化之時。手書以贈高弟日朗。則其殊勝而无不具者可知矣。而至今世所流布者。皆其略文。而其広者未出世。茲幸哉吾山蔵其広而附贈日朗書者一本。法嗣世伝謂之広安国論深見要言居士殆仏使之信士。嘗發大誓願。欲悉改正祖師遺書有写誤者彫刻之。以更伝于世求其正而且広者久。遂聞我山有蔵斯本。来薪就写則余以其一山之珍藏而辭焉。居士曰斯書雖君山之重宝。今秘而不与我。則是纔度此山住一人耳。若与我。則其所度无量広大矣。君今欲光耀一山之威

日蓮聖人遺文の繼承に関する一考察（木村）

徳而遺天下後世。豈慈家之志哉。於是余關藏鑰出宝書貸与之數十日。而今其功則成。誕鑄之梨棧。將以布于世焉。居士來乞序於余。余釈門之域僕繙林之樗材。素暗于文辭。則雖不堪慚視。然深嘉居士之成功。若其广大而且速矣。於是乎序。経曰。救一切衆生之心居士其存斯心者也。

寛政十二年庚申四月八日

大光山本圀寺大僧都法印日脱

（印「大光山主」）（印「本化正統勅伝日脱印」）

京都本圀寺藏、広本『立正安国論』を底本としていることがわかり、またその刊記には、

洛陽

大光山本圀寺什

大僧都法印日脱 印印

以御正本校行之

授与御書開板之主 深見要言者也²²⁾

と付され、大光山本圀寺日脱が本圀寺藏広本『立正安国論』を以て校合し、その校訂本を要言に差し出したことが記されており、第一巻『立正安国論』だけが他四本と底本が異なる事が指摘できるのである。²³⁾

この二種を基本史料として冠賢一氏は「慶長版本『御書五大部』の書誌学的考察」にて「慶長本」の書誌学的考察を、その慶長本を忠実に書写した「日相本」・「要言本」を手掛りに行なっている。この書誌学的考察より

慶長本の真筆との相違は「撰時抄」一四〇、「本尊抄」四七、「立正安国論」三七箇所である。その内容は中世諸

写本と比べてはるかに真筆に近く、この慶長本に勝る写本はない。すなわち、個別写本で最古の日法本「撰時抄」(一三二二年写)の相違は一四四、録内御書で最古の平賀本「撰時抄」(一四四三年)の相違は三二六箇所、そして他の九点の録内御書収録の「撰時抄」も、一九一〜二六二の相違箇所を数える。また、「本尊抄」も同様で、録内御書の本法寺本(一六〇八年以前書写)こそ、その奥書に「写本云私以御自筆直写本校合之者也」とあるように、真筆直写本をもって校合した写本を底本としたため、その誤まりは四四箇所と、四七箇所の慶長本に勝る。しかし、他の録内写本は平賀本の七〇箇所から、最多の立正寺本の三二四箇所まであり、慶長本に比べて、その内容ははるかに真筆から遠ざかる。(中略)

ここで考察した最初の版本遺文である慶長本の内容は、現存する真筆との比較によれば、中世の諸写本に勝るものであった。²⁸⁾

と指摘し、「慶長本」における文章表記の正確性を述べている。

次に、この「慶長本」「観心本尊抄」について管見ではあるが「慶長本」の継承と伝来、またその本文について書誌学的考察を加え、この「慶長本」が発見されたことによる新たな解題を明確化したい。

五、新発見による新たな問題点

現在に「慶長本」の外観を伝える「要言本」「観心本尊抄」は全四十丁からなり、序として寛政十二年四月に京都本法寺日道が記した「再刻本化高祖御書序」が三丁、「宗祖佐渡始頭本尊刷物」が半丁、そして本文が三十丁、その後「御書開板の興起」が五丁付されており、奥書には「文化五戊辰年四月 奥州名古曾関隠士 開板主 深見要言花

日蓮聖人遺文の継承に関する一考察（木村）

押」とある。さらに「要言本」には『観心本尊抄送状』も付されており、その本文末には

凡字数一百六十字外之十一字

以正中山御正筆第一稿之本謹寫之

一如院日重在判

中山輪番之節謹校合之

日道在判

日虔在判

とある。今回「慶長本」「観心本尊抄」が発見されたことにより「要言本」との相違を確認できた。「要言本」の『観心本尊抄』本文末には、

以正中山御正筆之本謹寫之

凡字数八千六百六十九字

○百五十二字

寂照院日乾

心性院日遠

慶長十一年丙午四月二十八日

命工彫之

とあるが「慶長本」「観心本尊抄」本文卷末には、

以正中山御正筆第一稿之本謹寫之

寂照院日乾

と記されており、ここに二点の相違を指摘できる。まず「要言本」においては中山の正筆を書写したことを日乾・日遠の兩名が記しているが、「慶長本」では「寂照院日乾」の名しか記されていない。また「慶長本」の本末文波線部の表記は「要言本」の『観心本尊抄送状』のそれと同一文であることが確認できるが「慶長本」は「寂照院日乾」、「要言本」は「一如院日重」である。この本文末に付される一文の相違はいかなる理由のためであろうか。高木豊氏は『開目抄』『撰時抄』『報恩抄』の分巻をめぐって——日蓮遺文の書誌に関する試論の一つ——にて冠氏と同様に「要言本」を使用し、「慶長本」について考察を加えている。その中において「要言本」「開目抄」に見ることができ、乾遠両師が「慶長本」付したであろうと思われる跋文の「再刻」が何を示すものなのか、その文字通り受け取るならば遺文最古の刊本を「慶長本」とする見解はくずれて同本以前にもう一本が予想されよう²⁵⁾と指摘している。

題再刻御書五大部後

我祖師大士曰釈尊之意无盡於法華經而日蓮之意亦盡於二三抄書焉然則所以奉我祖師者无善於校訂其遺文使汎伝于世矣而予視世所流布御書謬写頗多或至有脱數行恐使後世无辜人謬占祖師妄負誹謗罪矣是以欲校合之其本書以再刻者有年矣於茲余辱得入主于身延山嗣其法灯得縱閱祖師之親書不堪歎喜之至乃与我師日重共親写了其五大部及其他所藏于山中者數十卷命日誉日源日顯等彫刻之藏于院欲以広流布于天下信仰祖師之本意矣而其他彫刻未成者亦悉藏于院以俟後生之弟子及檀那力以継予之志云而

寂照院日乾 印印

慶長十四年〈太歳己酉〉初夏

心性院日遠 印印

この高木氏が指摘する根拠となっている「題再刻御書五大部後」は「要言本」の本文末に記されるのと同様に日乾・日遠両名の名をもって記されている。

これよりあくまで推測ではあるが高木氏が指摘する「同本以前にもう一本」とは「要言本」の底本となった「慶長本」とは別種の「慶長本」ではないかと思われ、「慶長本」は二種存在したのではないだろうかと推察されるのである。つまり、はじめに校訂・編纂され世に流布した「慶長本」（仮に「慶長本A」とする）はその文章表記に未だ誤謬多く、それでは「歓喜に堪えず」と、新たに日重は日乾・日遠にさらなる校訂を命じ、刊行となったのが「要言本」の底本となった「慶長本」（仮に「慶長本B」とする）ではないだろうか。これらをふまえると「題再刻御書五大部後」の「再刻」についての理解が得られよう。しかし重ねて記すがあくまで推測の域を脱しない為、今後のさらなる「慶長本」の発見が待たれる。

六、おわりに

現在、日蓮聖人遺文研究は「真蹟遺文研究」と「写本・刊本遺文による継承と伝来の研究」を分け考察されるようである。それは「真蹟遺文研究」において先学らの大いなる功績により研究がしつくされたように思考されてきた為であり、また「真蹟遺文研究」と「写本・刊本遺文の継承と伝来の研究」における先学研究の踏襲が未だ不十分なされていまいである。しかし昨今の「真蹟遺文研究の新局面」ともいえるべき論文にみられる真蹟遺文の用字・用語などについての新たな研究は「研究の深化」といえる。これによりさらなる研究研鑽が求められているように思われ、またこのような中で幻とされていた「慶長本」の発見はまさに遺文研究の新局面といえよう。管見ながら

「慶長本」について考察を加えたが未だ精密ならざる点が存在する。今後の研究課題として種々の遺文と更なる校合をなしたい。このことによりさらなる視点・問題点を持つに至ると思考される。

注

- (1) 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本 日蓮聖人遺文』一卷、五一―七頁
- (2) 冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』二四九―三四八頁
- (3) 浅井要麟著『日蓮聖人教学の研究』六五―六六頁
- (4) 辻善之助『日本仏教史』第八卷 一四頁
- (5) 浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻 四二―四頁
- (6) 日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』九九頁d、一〇〇頁b
- (7) 冠賢一稿「慶長版本『御書五大部』の書誌学的考察」(立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教学研究所紀要』第二二号、一頁)
- (8) 宮崎英修稿「日蓮教団史の諸問題」(立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教学研究所紀要』第一〇号、四頁)
- (9) 拙稿「新発見『慶長本』の書誌学的考察」(立正大学仏教学会編『大崎学報』一六七号) 参照
- (10) 梅本正雄編『乾師対校本 開目抄』九二頁
- (11) 梅本正雄編『乾師対校本 開目抄』一七二頁
- (12) この題箋には「慶長十一年四月百部摺／観心本尊鈔 完／身延山廿一代寂照乾師」と記されており、後世に付されたであろうと推察される。
- (13) 深見要言の『御書五大部』は文化五年開版と伝わる。(深見要言開版『御書五大部 観心本尊抄』「身延御書大野本遠寺御書」参照)
- (14) この両セットについて冠賢一氏は「慶長版本『御書五大部』の書誌学的考察」(立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教学研究所紀要』第二二号、一―二〇頁)にて詳細に考察されており、さらにこの両セットを基本資料とし「慶長本」について論究されている。また深見要言が刊行した『御書五大部』については筆者が拙稿「深見要言開版御書五大部に関する一考察」

日蓮聖人遺文の継承に関する一考察(木村)

日蓮聖人遺文の継承に関する一考察（木村）

- (15) 立正大学仏教学会編『大崎学報』第一六三号）参照のこと
- (16) 勇猛院日麿著『祖書編輯考』六丁ヲ（立正大学情報メディアセンター蔵）
- (17) 小川泰宣編『高祖遺文録』「新刻高祖遺文引」参照（論者蔵）
- (18) 浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻 四二八頁（平楽寺書店、一九九九年八月 第十七刷）
- (19) 浅井要麟著『日蓮聖人教学の研究』六九頁（平楽寺書店、一九七九年三月 第四刷）
- (20) 高木豊著『中世日蓮教団史攷』三一九～三二〇頁
- (21) 『御書五大部』第十四卷『観心本尊抄』三九丁ウ～四十丁ウ
- (22) 『御書五大部』第十四卷『観心本尊抄』四二丁ウ～四三丁ウ
- (23) 深見要言編『御書五大部』第一卷『立正安国論』刊記
- 校訂を中心に―（『小松邦彰先生古稀記念論文集 日蓮教学の源流と展開』三八一～四二二頁）にて論究した。
- (24) 冠賢一稿「慶長版本『御書五大部』の書誌学的考察」（立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教学研究所紀要』第二号、八～一六頁）
- (25) 高木豊著『中世日蓮教団史攷』三二一頁

※本論文は平成二四年六月二九日に行われた「平成二三年度 第一回身延山大学東洋文化研究所例会」における発表を加筆訂正したものである。